

『サントスの御作業』と『黄金伝説』・その五

遠藤潤 一

はじめに

本稿は前回の「その四」に引き続き、

- (6) サンチャゴ(使徒聖大ヤコブ)
- (7) 聖トウメ(使徒聖トマス)
- (8) 聖フィリップ(使徒聖ピリポ)

について、福島邦道氏の『サントスの御作業・翻字研究篇』と前田敬作氏ほかの『黄金伝説』との内容的比較について述べる。右の各章題は拙稿「その一」の「表1」における略表記によったが、その便宜的表記の「サンチャゴ」は「サンチャゴ」に改めた。たとえば「聖トウメ」はローマ字本文で「S. Thome」と表記されるが、「聖ヤコブ」のスペイン語名「サンチャゴ」は「Sanctiago」で、聖人名に冠する語と聖人名との間の切れ

目が無い綴りなのでこのように表記することにした。なお、聖人名表記は、文章中では原則として『黄金伝説』における表記を使う。

一 (6) サンチャゴ

『サントスの御作業』(略称サ)における本章の章題は、サンチャゴ マヨオル アポストロの御作業、並びにそのマルチリヨの様体ようたい、これサンアントニノの記録なり。とある。『黄金伝説』(略称黄)では「使徒聖大ヤコブ」である。前述のように「サンチャゴ」は「聖ヤコブ」のスペイン語名。「マヨオル (Maor)」はラテン語で「より大きい、年長の」という意であるから、「大ヤコブ」である。「小ヤコブ」は拙稿「その四」。彼はスペイン解放の聖人・スペインの守護者と言

われるが、そのような伝説によってスペイン語名が広く行き渡っていたのだろう。

(サ)の冒頭部では、「敵軍の滅ぼし手」とか、「合戦せんと思ふみぎりは一同音にサンチャゴと叫び奉るとなり」(邦訳日葡辞書の「トキ。または、トキノコエ参照」とあるが、このようなスペイン戦士の守護者としてのイメージで語られる部分は(黄)には無い。

対応関係は、(黄)から見ると、冒頭部分を除いて前半部がだいたい連続的に(サ)と対応すると言える。その内容は、聖ヤコブがスペイン伝道の後、ユダヤに戻って伝道する話(魔術師ヘルモゲネスとの対決)、殉教、そして遺体がスペインに移送され、埋葬されるまでの物語である。その後は聖ヤコブの墓に参るというテーマで、その功德・奇跡について語る伝説の類(黄の注①)によると「巡礼奇跡譚」を多く掲げているが、その内の二話が(サ)と対応する。一方、(サ)から見ると、(サ)では冒頭からの五四頁・五五頁は(黄)との対応は部分的なものが少々見られる程度であるが、五六頁から五九頁まで、それと六〇頁の最初の三行までが(黄)と連続的に対応する。そして、六一頁の後半から六二頁(この章の最後の頁)の大部分が対応する。

(黄)の本章はまず例によってこの使徒の名前の解説から始まる。「ゼベダイの子ヤコブ」「福音史家ヨハネの兄弟のヤコブ」「ポアネルゲすなわち雷の子」「大ヤコブ」と呼ばれる理由につ

いてそれぞれ説明している。(サ)でも「ゼベデヨの子」「サンジョアンの兄弟」「マヨオルと言われる理由」はそれぞれ言及されてはいるが、(黄)とは文脈が異なるのである。「キリシタンの御大将」としての武人の生涯の概略をも述べているが、この内容は(黄)には見られない。これはスペイン解放の戦士としての彼の伝説に焦点を合わせたもので、(サ)の底本の特徴なのであろう。

(黄)の「大ヤコブ」という呼び名の解説の中に、
第二に、彼がとりわけ主と親密であつたためである。というの、彼のほうがもうひとりのヤコブよりイエスと親しかったようにおもわれるからである。その証拠に、主がヤイロの娘を蘇生させられたとき(「マコ」五の二三以下ほか)や、山上でのご変容のときのように内密にことをはこぼすとされたときは、ヤコブをつれていかれたのである。とあるが、(サ)では冒頭部の次の段落に、

この貴きアポストロはゼズキリストの御弟子の中においてとりわけ御大切に思召す三人の御うちなり。ゼズキリストこのアポストロを貴きトランスヒゲラサン(キリストの御変容)の時も、又シナゴウガ(会堂)の司の娘をよみがへし給ふ時も、又御バシオン(キリストの御受難)の森の中の御悲しみの時も以後の証拠のため、又は御供のために召連れ給ふなり。

とある。両者の筆者傍線部はこのように内容的には対応する

が、両者はこのように文脈が違うのである。(黄)の「ヤイロ」であるが、これは割注に従つて『マルコによる福音書』第五章二二節を見ると「会堂司のひとりであるヤイロという者——」とあり、これが(サ)の「シナゴウガの司」であることがわかるのである。(サ)の「御弟子の中において——三人の御うちなり」の「三人」とは、(黄)には無いが、「ペテロ・大ヤコブ・ヨハネ」のことである。

なお、(サ)の「よみがへし給ふ時も」の「よみがへす」は日葡辞書には登載されている。語意は「人を生きかえらせる」。

以下、対応部の概要を記すと次のようになる(番号は筆者)。

- ① ヤコブ、ユダヤとサマリアの伝道の後、スペインに渡り、またユダヤにもどる。
- (サ) ゼズキリスト御上天の以後——(五五頁)
- ② 魔術師ヘルモゲネスが弟子のピレトスにヤコブの説教を論破させようとする。
- (サ) さればサンチャゴ イスパニヤよりジュデアへ帰り給ひて、——(五六頁)
- ③ ピレトスはヤコブの弟子となる。ヘルモゲネスは悪霊たち^{たち}にヤコブとピレトスを捕らえさせようとする。
- (サ) 博士術道をもつて天狗を招き、——(五六頁)
- ④ ヤコブは悪霊たちにピレトスを連れて行かせようとする。

(サ) アポストロ、ヒレトはここに居ければ、何とて連れて行かぬぞと宣へば、——(五七頁)

⑤ ヘルモゲネスまでがヤコブの弟子となったことを知ったユダヤ人たちが、激怒してヤコブのところ^{ところ}に押しかける。ヤコブの殉教。

(サ) ジュデオ等このことを大きに怒り、——(五七頁)

⑥ ヤコブの弟子たちがヤコブの遺体を船に乗せて運び出す。

(サ) カリストババと、ジョアン ベレトといふこの御兩人、——(五八頁)

⑦ ヤコブの伝説。ある人の大罪を消滅させた話。

(サ) このアポストロのエケレジャにテオドロ アルセビスポの御住院の時、——(六一頁)

⑧ ヤコブの伝説。ある巡礼のこと。

(サ) 御出世より千九十年に当つてアレマニヤの国の人^が——(六一頁)

(サ)の対応部は以上である。なお、⑦・⑧の「ヤコブの伝説」は(黄)の注(一六)では「巡礼奇跡譚」と称している。

以下は今までと同様に、(黄)との対応で指摘してよさそう^な(サ)の箇所を拾い出して、コメントを加えてゆきたい。

6—1・(1) ゼズキリスト御上天の以後この貴きアポスト

ロ ジュデアとサマリヤを御談議し給ふなり。その後のちもろのアポストロ御おん弘ひろめの国分けをし給はぬ前に、イスパニヤへ渡り給ふなり。その国人等愚痴おろちなるが故に、御談議の徳を取らぬことを御覽ごらんせらるるなり。その故はただ九人ばかりキリシタンになり奉るなり。その中うちより二人にんをばその所に残し給ひ、七人をばジュデアへ召し具し給ふなり。
(五五)

(ゼベダイの子の使徒ヤコブは、主のご昇天後ユダヤとサマリヤの地を伝道して歩き、その後主のみ言葉をひろく伝えるために、スペインに渡った。しかし、成果があがらず、この地で得た弟子はわずか九人にとどまったので、そのうちのふたりを伝道のためにスペインにのこし、あとの七人をつれてユダヤへ帰った。) 2—468—469

これは対応部の冒頭である。内容は大体対応していると言えよう。筆者傍線部だが、(サ)の「徳を取らぬ」は「利益を得ない」、すなわち、人々が御談議の恩恵をこうむらない、という意味。『こんてむつすむん地』(朝日・吉利支丹文学集・上)の巻第一「第九 ことばをすこすまじき事」に「なげかしきかな、此物がたり。みもなき事はおほく、とくをとる事はすくなし」と、筆者傍線部の例がある。

なお、(黄)の注(一)によると、イスパニア伝道は歴史的確証を欠く伝承とのこと。

6—1・(2) さればサンチャゴ イスパニアよりジュデアへ帰り給ひて、大きなヘルオル(熱情)をもつて御談議し給ひ、スキリツウラ(聖書)の証拠をもつてゼスキリストはデウス ヒイリヨ(聖子)にてましますことを弘め給ひ、又ジュデオの学匠、スクリバラを強き道理をもつて詰め給ひ、御教へを色々の御奇特をもつて固め給ふが故に、かのジュデオ等過分の財宝をエルモゼネスといふ博士に取らせ、このアポストロと問答し奉れと、約諾するなり。この博士の曰く、我出でて問答するに及ばず、我が弟子にヒレトといふ者を遣はすべしと言へり。さてこのヒレトと、数多おほくのフアリゼヨ(フアリサイ派の人々)を遣はして、アポストロをつめ奉らんとするといへども、万事に勝ち給ひ、数多おほくの御奇特おんをそれが前にてし給ふなり。(五六)

(さて、ヤコブがユダヤの地で神のみ言葉を宣のたまべていると、ヘルモゲネスという魔術師は、弟子のピレトスを数人のバリサイ人といつしよに送つてよこし、ユダヤ人たちの面前でヤコブの説教が嘘八百であることを彼自身にみとめさせようとした。しかし、ヤコブは、多くの人びとが聞いてゐるまゝで理にかなつた理由をいろいろあけてピレトスをやりこめ、彼の眼のまゝで多くの奇跡をおこなつた。)

2—469

(黄)には魔術師ヘルモゲネスがユダヤ人たちに依頼されてヤコブ攻撃の行動を起こしたというようなことは述べられてい

ないが、ユダヤ人たちの面前でヤコブをやり込めようとしてゐるわけだから、行動の背景には(サ)の内容と一致したものがあつたのだと考えることができるだろう。(黄)と対応する(サ)の部分は「さてこのヒレトと、」以下であると言える。

(サ)の筆者傍線部「——つめ奉らんとする」は(黄)の「——嘘八百であることを彼自身にみとめさせようとした」と対応する。この「つむ(る)」はまた(黄)と対応しない前出波線部分中に「強き道理をもつて詰め給ひ」がある。邦訳日葡辞書にはこの例とはほ同じの「ダウリヲモツテ イイツムル。(道理を以て言ひ詰むる) 理詰めにして人をやりこめる。」という例が挙げられている。また、(サ)と対応しない(黄)の波線部中に、「ヤコブは、——理にかなつた理由をいろいろあげてヒレトスをやりにこめ、」があるのも参考となる。なお、(サ)の波線部中の「御教へを——固め給ふ」の「固む(る)」は邦訳日葡辞書では理論的防御の意味は挙げられていないが、「ウラウラヲカタメテ フセグ。(浦々を固めて防ぐ) あちこちの場所「の守り」を堅固にしてそこを防御する。」という例はある。

ところで、この波線部中の「ジユデオの学匠、スクリバラを」であるが、これは「——スクリバ等を」としなければならぬところだろう。この「Scribana no」の「スクリバ」はラテン語「Scriba」の「ユダヤの律法学者」という意味である。また、「等」は類例として、反キリシタンに対しての「ゼンチヨラ」「ジユデオラ」がある。ここでは一般の学者と律法学者とを併記して

いるのである。

(サ)の「御奇特を——し給ふ」は表現として少々不安定な感じもするが、邦訳日葡辞書には「キドクヲ スル」がある。なお、「博士」と「魔術師」の対応については拙稿「その一」で言及した。

6-2 アポストロ、ヒレトはここに居ければ、何とて連れ行かぬぞと宣へば、その御家ごけにある蟻ありにも手をかくること叶はずと申すなり。(五七七)

(ヤコブは言った。「それ、ヒレトスが眼のまゝに立つてゐるではないか。どうしてつかまえないのだ」悪霊たちは答えた。「あなたさまのお部屋にいる者は、蟻一匹といえども手をふれるわけにはまいりません」) 2-470

(サ)の筆者傍線部は意が通じないわけではないが、返事としては唐突な感をまぬがれない。訳出不足と言えようか。「御家中」は(黄)では「あなたさまのお部屋」。

6-3 その後アポストロ ヒレトに、我等に対して仇をなす者に良き事を与ゆるために汝を搦めけるエルモゼネスを解き許されよと、宣ふが故に、解き許されければ、万民の前に面目めんぼくを失ひけるなり。(五七七)

(ヤコブは、ヒレトスに言った。「主がわたしたちにお教えになつたように、悪には善をもつてむくいることにしよ

う。ヘルモゲネスは、あなたをしばった。ですから、あなたは、彼の縄をといてやりなさい」こうして、ヘルモゲネスは、縄をといてもらい、面目を失つて小さくなつていた。

21470

(サ)の筆者傍線部、このごちない訳出については拙稿「その一」で触れた。なお、「面目を失ふ」の訳出上の一致にも注目する必要があるだろう。(黄)では「メンボク・メンモク」両方に読めるが、(サ)では「メンボク」である。邦訳日葡辞書では「メンボク」は「名譽」の意、「メンモク」は「顔」の意。なお、(サ)の「解き許されければ」の「れ」は「受身」である。(黄)の波線部参照。

6-4 アポストロカの博士に、御主はまげて人より御奉

公を望ませられねば、汝のままにいづくへなりと行けと宣へば、博士の曰く我天狗の怒りの大きなことを弁ゆれば、それより殺されぬ防ぎ道具を与へ給へど。その時アポストロ御杖を与へ給へば、それを持ちて我が所まで無事に帰つて、あるほどの経を取つてアポストロへ参り、焼き給へと擲け、(五七)

(ヤコブは、彼に声をかけた。「さあ、どこなりと好きなところへ行きなさい。相手がいやがるのに改宗させるのは、わたしたちのやりかたではありませんから」ヘルモゲネスは言った。「あの悪霊どもの怒りがこわくてなりません。

あなたが身につけていらつしやるものをなにかお借りしないことには、連中に殺されてしまいます」そこで、ヤコブは、自分の杖をあたえた。ヘルモゲネスは、そこを出ていくと、自分の魔術の本を全部ヤコブのまえにはこんできて、

どうぞ焼きすててくださいと言つた。) 21470-471

(サ)の「まげて」は「相手の意志を押えつけて」無理に」という意味で、動詞の例。(黄)では「相手がいやがるのに改宗させる」とある。(サ)で「焼き給へ」と「経」を捧げた博士が、その後この後統部で、その「経」を海に投げ捨ててしまふのがなんとなくわからないが、(黄)ではその間の経緯が述べられている。なお、(サ)の「いづくへなり」とは「いづくへなりとも」が正、「焼き給へど」は「焼き給へと」が正。

6-5 ジュデオ等このことを大きに怒り、アポストロを召

し取り、我等よりクルスにかけられける人の名を弘め給ふかと言つて、アポストロを大きに罵詈り奉るなり。アポストロはスピリツサンチ(聖霊)を充ち満ちて受け給ふによつて、スキリツウラ(聖書)と、プロヘシヤス(預言者たち)をもつて御助け手の御出世と、その御パシオン(受難)を

あらはし給ひ、又そのスキリツウラ、プロヘシヤスを皆御助け手ゼズキリストに達して逐げ給ふといふことを見せ給ふなり。その年の年行事アヴィアタルといふ人これを見て万民に御敵となるための勧めをなし、アポストロの御首に

網を投げかけさせ、御手を搦め奉り、アルセラオの子息エロデス アグリパといふ国司の前に召し連れ、万民の乱らし手なりと訴へて、生害し奉らんと仕度しけるなり。それによつてエロデス御首を打てと下知をなす。(五七)

(ユダヤ人たちは、ヘルモゲネスがヤコブに改宗させられたと知ると、ただではすまされぬとばかりにヤコブのもとに押しかけてきて、十字架にかけられたイエスの教えを説くのはけしからんと食つてかかった。しかし、ヤコブは、キリストのご生誕とご受難は預言者たちによつて預言されていたことだと、聖書を引用してはつきり証明してみせた。これを聞いて、たくさんの人びとが入信した。ところが、この年の大祭司アビアタルは、民衆をそそのかして騒動を起させ、ヤコブの首に繩をかけてヘロデ・アグリッパ王のまえに引いていかせた。王は、刎首にせよと命じた。)

2—471

(サ)の筆者傍線部の内容は不分明であるが、(黄)ではよく筋が通っている。このようなことを言おうとしているのである。つまり、「預言者(の預言)を以てキリスト生誕と受難のことをあらわし、聖書を以てその預言の内容が完全に逐行されたことを示した」というような内容を誤訳したのではなからうか。なお、(サ)の「万民の乱らし手」は(黄)には直接対応する部分はないが、(黄)の筆者傍線部を利用すると、「民衆をそそのかして騒動を起させ(る者)」ということにならう。「乱ら

し手」、また「乱し手」も日葡辞書には無い。しかし、キリシタン書には「——手」という造語は多い。なお、(サ)の「それによつて」は「それによつて」が正。

6—6 アポストロ御首の座に引かれ給ふ道に中風を病む者一人ありしが、アポストロを頼み奉るに、我今御大切に對して首を打たるナザレトのゼズスの御名をもつて起き上りて、御作者へ御礼を申せと宣ふ折節、確に立ち上りて、御主の御名を尊み奉るなり。(五七—五八)

(こうしてヤコブが刑場へ引かれていく途中、道ばたに足の不自由な人がひとり寝ていて、聖ヤコブに声をかけ、どうぞ歩けるようにしてくださいと言った。使徒は、「わたしは、いまイエス・キリストのために刑場へ引かれていくところだが、そのイエス・キリストの御名において命じる。さあ、しっかりと足で立ちあがり、あなたの創造主をたたえなさい」とすると、男は、たちまち足なえが治って立ちあがり、神をほめたえた。)

2—471

(サ)の筆者傍線部、まず「——首を打たる」だが、(黄)を参照するまでもなく、ここで文が切れるか接統助詞「が」などが入るべきところと言える。次に、「——ゼズスの御名をもつて」だが、(黄)では「イエス・キリストの御名において命じる」である。そうすると、(サ)も本来は「——ゼズスの御名をもつて(命ずる)。起き上りて——」と訳出されるべきと

ころなのかとも考えられる(以上については「その一」で言及した。
また、「我今御大切に對して」だが、これは(黄)の「わたしは、いまイエス・キリストのために」と対応する、つまり、「に對して」は「のために」と対応すると言え。邦訳日葡辭書で「對する」を引くと、「デウスニタイシ タテマツリテ」があるが、その意味は「デウス(Deus) 神」の愛にかけて、あるいは、デウスを尊ぶ故に」となっている。これを利用して本例を解釈すれば、「我今御大切に」となる。

「に對して」について福島邦道氏は「研究篇」において姉崎正治氏の指摘に言及され、姉崎氏の『切支丹宗門の迫害と潜伏』から、「今でならば「の為に」といふべき処が尽く」「に對し」となつて居るのは、ポルトガル語の *por* (英語 *by*) の語法かと思はれ、(P・132) を引用され、「と言われているが、これも翻訳文の文体に入るべきものであろう。」と述べておられる。一方、村岡典嗣氏は『吉利支丹文学抄』の「吉利支丹文学用語抄」において「對して」を挙げられ、原文英訳における相当語句として「for the sake of」を挙げられ、「さんばらあん」とさんじよさはつの御作業」から「ゼス、とやらんに對して、世の栄花を捨て、かゝる拙き身となりては何の益かあるべきや」を、また「こんでむつすむんち抄」から「キリシトに對し奉りて敵對ふ事を凌がずんば、何を以てかキリシトの御知音とはなり奉るべき」(以上漢字字体等改変・傍線筆者)を示される。

6-7 かくのごとくして御兩人ともにヒイデス カトウリカ(カトリックの信仰)に對してゼズキリストのインカルナサン(託身・受肉)、又クルスにかけり給ふは、三月二十五日に御首を打たれ給ふなり。その時代の帝王はクラウデイオナリ。ゼズキリストの御出世より四十年にあひ當るなり。
(五八)

(それから、首を打ち落とされて、ふたりいっしょに殉教をうけた。

聖ヤコブが首をはねられたのは、三月二十五日のことで、主のお告げの日であった。) 2-472

(サ)の筆者傍線部については拙稿「その二」で言及した。「給ふは」は「給ふ日」が正。また、筆者波線部の前出の「に對して」だが、これは「ヒイデス カトウリカに對して——御首を打たれ給ふなり」となる文であり、「カトリックの信仰のために——」という意味である。

なお、(サ)の次の段落に、
その御弟子アポストロの御死骸を夜に入つてひそかに取り、——イスパニヤの国コンポステラといふ在所へ着き給ふなり。かるが故にその所の名をも今はサンチャゴを御在所と改めたり。

とあるが、筆者傍線部の内容が不分明である。この部分は(黄)には無い。(黄)の「コンポステラ」の注(四)に拠つて推測すると、(サ)ではその地が「サンティアゴ・デ・コンポステラ」

と呼ばれるようになったということを述べたつもりなのである
うと思われる。この「在所」の意は「居る所」。

これに続いて次のような箇所がある。

この貴き御死骸は七月二十五日にその所に着き給ふなり。が(か)るが故にその日をエケレ ज्याよりその祝ひ日と定め給ふなり。また十二月晦日に埋まれ給ふなり。その故は七月の晦日にガリシヤへ着き給ひてより、十二月までその御死骸を埋むことを延べ給ふなり。

(聖遺体は、七月二十五日にコンポステラに移され、十二月三十日に埋葬された。しかし、墓の建立が八月から一月まで延びたので、教会は、彼の祝日を各地で祝うのに都合がよい七月二十五日と定めたのである。)

この(サ)の筆者傍線部は理由として薄弱な感がある。一方、(黄)では、遺体の到着・埋葬・墓の建立という順で述べられ、最後に祝日の制定について述べて、これが主眼となっている。なお、「が(か)るが」の括弧内は卷末正誤表で正とするもの。

6—8 カリストパパと、ジョアン ベレトといふこの御兩人、御首を打たれ給ひてより、イスパニヤへ御死骸の移り給ふことを確に書き置き給ふなり。その書に曰く、貴きアポストロ御首を打たれ給ひてより、その御弟子夜に入つてひそかに取り奉り、舟に乗せ奉り、船中の櫓、棹、帆をも捨てて埋まれ給ふべきところをば御計らひにまかせた

てまつると居られければ、御主のアンジョ導師としてガリシヤの国にてロバといふ侍なる女人の領内に着き給ふなり。御死骸を舟よりおろし奉り、大石の上に置き奉れば、その石臘のごとくにやはらぎて、御死骸の入り給ふほどくばみて御棺となりたるなり。(五八)

(さて、ヨハネス・ベレトは、この聖遺体の移居を以下のように丹念に書きしるしている。聖ヤコブの斬首がおこなわれたあと、弟子たちは、ユダヤ人たちを怖れて、夜こそり聖遺体を持ちだし、船に乗せて、埋葬の場所は神の思召しのままにゆだねることにした。そして、自分たちも聖遺体といっしょに乗りこんだが、進路は風まかせにして、舵をいっさいあやつらなかつた。すると、主の御使いが、船をガリシヤにみちびいていって、一同は、ルバの王国に上陸した。ここは、イスパニアの地で、女王が治めていて、その女王の名前がルバであつた。この名前は、彼女の生きざまをあらわしていた。というのは、ルバ(Luba)とは、雌狼 という意味だからである。弟子たちは、聖遺体を船からおろして、大きな石のうえに置いた。ところが、おどろくなかれ、石は、聖遺体の重みで蠟のようにくぼんで、棺の形になつた。) 2—472—473

(サ)の筆者傍線部は「カリストパパと、ジョアン ベレト」と、二人の名が拵がつているが、(黄)では「ヨハネス・ベレト」(「ジョアン ベレト」)だけである。「カリストパパ」は(黄)の

本章の他の箇所(↓6-11)に「教皇カリストゥス」として出てくるが、その注(二二)に「第一六三代教皇カリストゥス二世(位一一一九—一二四)。」とある。また、「ヨハネス・ベレト」は(黄)の第一卷第三〇章「聖ユリアヌス」の注(一一)に「二世紀の典礼学者。」とある。なお、(サ)の「確に書き置き給ふなり」は(黄)では「丹念に書きしるしている」である。

また、次の傍線部の「ロバといふ侍なる女人」は(黄)では「その女王の名前がルバ」とあり、名前の解説が入っているが、これは本話の展開についての示唆とも言える。(サ)の「ロバ(Oba)」はポルトガル語・スペイン語で「雌狼」の意。なお、「ガリシア」はスペイン北西端の地方の称。

6-9・(1) 御弟子はその在所に入つてこの治め手なる女人に宣はく、我等が御主ゼズキリスト御身のアポストロの御死骸を御身へ遣はし給ふなり。生きてる給ふ時、受け給ふことを御望みなきが故に、死し給ひて、受け給へとの御事なりと宣へば、女人この由を聞いて、イスパニヤの国司のもとへ武略をもつてその御弟子を遣はし、この儀同心せらるるやうにと言ひ送らるるなり。かの大守あらけなき人にて、その人々を籠者させけるなり。(五九)

(弟子たちは、女王のもとに伺候して、「わたしたちの主イエス・キリストは、弟子の遺体を女王陛下に送りとどけ

られました。陛下は、この弟子を生きていたときは歓迎なさいませんでした。いまは死んだ姿でお受け入れ願ひとうございます」そう言つて、舵もとらずにこの国にみちびかれた奇跡を女王に話し、埋葬に好適な場所をおあたえください、と願ひでた。これを聞いた女王は、悪辣な計画をめぐらして、弟子たちをある残忍きわまる人物のところに送りこんだ、とヨハネス・ベレトは書いています。これには異説があつて、この件にかんして助言をもとめるためにイスパニアの王のもとに送りとどけたとも言われる。王は、彼らを抑えて牢獄に入れさせた。) 2-473

(黄)の筆者傍線部の「異説云々」は(サ)には無い。(黄)の内容はその「異説」に従つていふと言へる、つまりヨハネス・ベレトの説ではないと言へるのであるが、(サ)の場合もその(黄)と内容的に一致している。

(サ)の筆者傍線部「籠者」は「——せさせ」ではない例。邦訳日葡辞書の「籠者」の語釈は「囚人、すなわち、獄舎に入れられた者」(prelo, ou encarcerado)である。福島邦道氏に「ロウシヤ」か「ロウジヤ」か(「続キリシタン資料と国語研究」所収)という高論があるが、そこで氏は「筆者は、囚人、又は、投獄された(encarcelado)」と訳したのである」と述べられる。これについて私見を述べると、筆者も「すなわち」ではなく「又は」の方が良いと思う。理由を述べる前に、次の語は「投獄された者」となるのではないか。「又は」の理由だが、「投獄され

た者」という概念は「囚人」より広く、たとえば「捕虜」などの類も含まれると思うからである。邦訳日葡の参考例として「メシユウト（囚人）」の語釈が挙げられる。これは「囚人、または、刑の宣告を受けた人」(priso, ou condenado) となっている。なお、古活字版「伊曾保物語」第一種本中巻第九話に「ろうしやせしむ」が出るが、これは第二種本・第五種本等では「籠者」となる。日葡辞書には「籠舎・牢舎」は無い。

6-9・(2) これ皆悪心をもつて山牛は荒きものなれば、取り得ることあるべからず、取らんとせば、突き殺さるべしとの心当てなり。しかれども人の知恵をもつてテウスの御計らひを押へ奉ること叶はざれば、この武略をば夢にも知らず、その山に登らるれば、向かへの山より火焰を吹き出す大蛇出できたるに、クルスを唱へ給へば、その蛇の腹裂けて死するなり。又牛にも同じくクルスを唱へらるれば、羊のごとく柔和になりて、近づき来たるを取つて、車につけてその上に御死骸を石の棺ともに置き奉れば、案内者もなきに、かの牛御奇特をもつて件の女人の館へ引き着けたるものなり。(五九)

(ルバがこう言ったのは、雌狼の悪だくみであつた。というのは、この牛どもが飼い馴らされてない野生の牛であることは、先刻ご承知で、車につなぐことはもちろん、つかまえることもできず、もしそんなことをしようものなら、

あばれまわつて、車をこわし、遺骸をほうりだすばかりか、弟子たちまで殺してしまふにちがいないと胸算用していたのである。しかし、どんな悪知恵も、主には通用しない。はたして、弟子たちは、女王の悪だくみとは知るよしもなく、山に登つていった。山上で、一匹の竜に出くわした。竜は、火を吐いてとびかかってきた。しかし、彼らが十字を切ると、竜の胴体は、まつぶたつに裂けた。彼らは、牛たちにむかつて十字を切つた。すると、小羊のようにおとなしくそばにやってきた。そこで、弟子たちは、苦もななくびきにつけて、遺骸とその棺になつていた石をいっしょに車につみこんだ。すると、牛たちは、人間が手綱を引かなくてもひとりでに車をルバの宮殿のなかへ引いていった。) 2-474

(サ)の「これ皆悪心をもつて」は係るところが無いが、(黄)では「——悪だくみであつた。」と文が完結する。「御死骸を石の棺ともに置き奉れば」は「遺骸とその棺になつていた石をいっしょに車につみこんだ」と対応し、誤訳ではない。なお、波線部の「取り得ること」は一段化の例。また、「クルスを唱ゆる」については拙稿「その一」で言及したが、森田武氏「日葡辞書提要」三四三—三四五頁に拠れば、「唱ユル」は教会通用語で、「口に唱えるばかりでなく、それにある動作が伴なう」のであり、「クルスノシルシヲ唱ユル」を省略して「クルスヲ唱ユル」とも言い、後者の言い方のほうが多い、ということになる。「山牛」

はエソポ物語の「ある年寄った獅子王の事」にも出るが、日葡辞書には無い。また、波線部中の「向かへ」は日葡辞書には無い。「大蛇」は(黄)では「竜」であるが、羅葡日対訳辞書を見ると、「竜」は「Draco, onis, Lus. Drago, lap. Reo. daija.」で、日本語では「竜」とともに「大蛇」を当っている。これによつて考えれば、(黄)では「竜」、(サ)では「大蛇」というのも問題は無いと言えるかも知れない。しかし、邦訳日葡辞書で「竜」を引くと、「Agarto」を当てているが、編訳者注では「この語は蜥蜴や鱉などの爬虫類を意味するが、本書ではそれを「竜」にあて用いている。」とある。つまり、日葡辞書では「竜」の語釈に「Dragao」も用いていないし、「Grande serpente」(大蛇)も用いていない。この点は(サ)の「和らげ」で「悪竜」を引いても同じである。この辺のところの問題点として残るであろう。森田武氏「日葡辞書提要」四四四～四四五頁では羅葡日の「Draco, onis」の条には触れておられない。

6—10

このアポストロのエケレ ज्याにテオドロ アルセビスボ(司教)の御住院の時、或る人大きな科を犯し、その身のペアデレにあらはしければ、ペアデレよりまたビスボに申せとて、遣はされたり。ビスボもその科を聞き給ひて大きに驚かせられ、御許しを与へ給ふべきことをいかにと思し召し、「ベダ学匠の言へるごとく」彼にその科を記したる札をもつてサンチャゴの御死骸のまします所へまゐ

れと仰せつけらるるなり。(六一)

(ベダが語つてるところによると、ある人が、数回にわたつて大罪を犯した。司教も、赦免をあたえるわけにはいかなかった。そこで、罪を書きつらねた紙片をもたせて聖ヤコブ教会(サンティアゴ大聖堂へ巡礼させた。)

—474—475

(サ)の筆者傍線部で、まず「ベダ学匠の言へるごとく」は本文のこの部分に括弧して挿入しているが(第一巻巻末の正誤表にはこれに関する指摘は無い)、恐らく原典でもそうであつただろう。冒頭の傍線部「このアポストロのエケレ ज्याにテオドロ アルセビスボの御住院の時」は(黄)には無いのだから、「ベダ学匠」の場合も原典本文の違いによるのだろうと考えておく。「ベダ」すなわち「ベダ」は(黄)の第一巻四章「主のご公現」の注(二)によると、イギリスの聖人(六七三頃—七三四)、教会博士で、中世最初の科学的神学者と言われるそうであるから、(サ)で「学匠」としている点も首肯できる。なお、「このアポストロのエケレ ज्या」とは後出の「サンチャゴの御死骸のまします所」であり、それは(黄)では「聖ヤコブ教会」となっている。

この後、(サ)(黄)の対応は次のようになってゐる。

かしこまつてまかり出で、御祝ひの日にその札をアルタ(祭壇)の上に置きければ、そのエケレ ज्याのビスボミサを行なひ給ひて後、

(その人は、聖人の祝日に祭壇に紙片を置いて、聖人の
功徳で罪を消滅させてください、と祈った。)

(サ)では漠然と「御祝ひの日」としているだけであるが、(黄)
では「聖人の祝日」すなわち聖ヤコブの祝日とし、聖ヤコブの
功徳で罪の消滅を、と本人が祈っている。邦訳日葡辞書の「イ
ワイビ(祝ひ日)」に、「イゲレシヤ(教会)内で通用している語
であるが、それは日本の祝祭日はイワイノヒ(祝の日)と言わ
れるからである。」との説明があるが、これに則して言えば、(サ)
の本例は教会通用語ではないということになる。森田武氏の『日
葡辞書提要』三四三頁に「祝イ日」についての考察があり、そ
こでは「サントスの御作業、信心録、おらしよの翻訳、スピリ
ツアル修行などの諸書では「祝イ日」だけで「祝ノ日」は使わ
れていない」とある。前出6—7に「祝ひ日」が出る。

6—11 御出世より千九十年に當つてアレマニヤの国の人我
が子を連れてこのアポストロの御死骸を拜し奉らんと赴く
とて、トロサといふ在所に宿す、(パバカリスト宣ふこと
く)その亭主酒を多く強ひて心を乱らすなり。これは睡中
に盗人となして持ちたる物を取らんとしたばかりなり。さ
れば前後も知らず見えたる折節、子息の持ちたる袋の中へ
銀錢を一つ入れて置く。明くる日宿を出でてより、盗人ぞ
とて追ひかくるなり。(六一—六二)

「教皇カリストゥスが語っている話であるが、1010

年のこと、あるドイツ人が、息子とふたりで聖ヤコブの墓
所へ巡礼の旅に出た。途中、トゥールーズの町(南フラン
スの中心的な町)で宿をとることになったが、宿屋の亭主は、
酒をすすめて酔いつぶれさせ、銀の杯をひとつ巡礼の旅行
かばんのなかにこっそり入れておいた。さて、朝になって
親子が出立すると、亭主は、うしろから待てと呼びかけ、
泥棒よばわりをしてつかまえ、わたしの杯を盗んだと言っ
て無実の罪を着せた。) 2—476

(サ)の「(パバカリスト宣ふことく)」は、この場合も本文
のこの箇所には括弧して挿入している。「アレマニヤ(Alamania)」
はポルトガル語で「ドイツ」の意。(サ)では「千九十年」で
あるが、(黄)では「1020年」であり、この違いはどうし
たことか。

また、(サ)の「乱らす」は、邦訳日葡辞書での意味は「紛
糾させる」で、「ヨラ ミダラス(世を乱らす)」「テンカラ ミ
ダラス(天下を乱らす)」と、二例とも政治的・社会的な意味の
用例で、前出6—5の「乱らし手」もそうであったが、ここで
は「心を乱らす」という用例である。なお、邦訳日葡辞書の「乱
す」は「混乱させる」の意。用例の中に「ココロラ ミダス(心
を乱す) 心なり内心なりを混乱させる、あるいは、騒がす。」
がある。

「パバカリスト」すなわち「教皇カリストゥス」は6—8に
も出た。

ところで、この話は(サ)では「子息の持ちたる袋の中へ」亭主が銀盞を入れ、そのために子息が盗人として死刑になるのだが、(黄)では「巡礼の旅行かばんのなかに」亭主が銀の杯を入れて、その結果「親子のどちらか」が死刑になるという筋になっており、結果的には子の方が死刑になる。この点、(サ)の筋の方が道理にかなっているように思われる。

なお、(サ)の後続部に次のような箇所がある。

○ 我が子のホルカ(絞刑架)の上にあけるを見て、泣啼こがるるところに、

これはローマ字本文は「Horeka」であるから、「流涕」の誤りであろう。

○ その時父は喜びあがり、糺し手のもとに行いてかくと告ぐれば、

この「喜びあがり」に注目したい。「あがる」は補助動詞。

本章については以上であるが、ここで、(黄)との対応が見られない(サ)の部分で、文法・語法などの点で気の付いた例を補足しておきたい。

○ これほど剛なるつはものをば未だ見ず、向はるる敵の滅びずといふことなく、敵よりは何と切りつけども、その益なしと言へり。(五四)

この「切りつけ」は「切り突け」となるべきところ。日葡辞書参照。なお、「向はるる」の「るる」は「尊敬」。

○ ヒイデスに對せられて第一番に御首を切られ給ふが故に、まことのヒイデスの防ぎ手となり給ふなり。(五四)

この例は6・6・7を参照。

○ この七人はアポストロ御死去の後、御死骸をガリシヤといふ国へ隨身申さるるなり。——その身の導師アポストロの御死骸をガリシヤの国へ隨身ありてより、(五五)

この表現に注目しておきたい。なお、「導師」はローマ字本文「[toro]」だから、「導師」の誤り。

○ その御死骸のましますエケレシヤはキリシタンダアデ(キリスト教徒団)の中にすぐれたる参詣所と言ひふらさるるものなり。その故はゼズキリストへ仕へ奉る者深き信心をもつて参詣せずといふことなし。(五六)

この「その故は」これでも意が通じないわけではないが、少々おかしい。「故に」となるところではないかとも思われる。

○ キリシタンに弘めとの御定めなりと宣ひしと、サンカリストの宣ふなり。(五六)

これはローマ字本文では「[firneyo]」である。また、次のような例がある。

○ いかにも果報なるイスパニヤ、——デウスへ別して御礼を申せ。又ヒイデスのことを強くたしなめ、その故はこの勝れ給ふアポストロは大分限者にてましまし、(五四・五五)

これは四段活用命令形であるから、読点ではなく句点がほしい所。ローマ字本文では、この読点の箇所は「:」である。

二 (7) 聖トウメ

(サ) における本章の章題は、

サントウメ アポストロの御作業、並びにその御死去の様
体、これサンイシドロの記録なり。

とある。(黄) は第一巻第五章「使徒聖トマス」である。

(サ) すなわち福島邦道氏の『翻字・研究篇』の本文は六三頁から六七頁まで五頁分(ただし六七頁は三行)であるが、六六頁の大部分を除き、あとの内容・順序は(黄)と大体対応している。一方、(黄) は第一巻の八〇頁から九二頁まで一三頁分であるが、その冒頭は例によつて「トマス」という名前の語源的解説である。その後、八一頁の「使徒トマスがカイサリア市にいたとき、——」以下、全体にわたつて飛び飛びに(サ)と対応している。

対応部の概要を示すと次のようになる(番号は筆者)。

- ① キリストの命により、トマスは建築家としてインドに渡る決意をする。
- (サ) この貴きアポストロはセザレヤにエワンゼリヨを弘め給ふところに、ゼズキリストのまま見え給ひて、——(六三頁冒頭)
- ② 途中の港で、その土地の王の娘の結婚の宴に出席する。
- (サ) 然るに南蛮の勅使そのあたりを見物して、——(六

三頁

③ 祝宴でトマスが奇跡をあらわす。

(サ) 酒宴の半ばにジュエヨなる女の喜びの歌を歌ひける中に、——(六三頁)

④ トマス、新郎新婦に祝福を与える。

(サ) それによつて祝儀をせられたる主人、——(六四頁)

⑤ インドに着く。トマスは王から預かつた宮殿建築費を貧民に施してしまつたので、処刑されることになる。

(サ) さればサントウメ件の使者ともに南蛮へ着き給へば、——(六四頁)

⑥ 王の弟の天国での体験談と進言によつてトマスは許される。王以下みなキリシタンになる。

(サ) 然るにゴトと申す帝王の御舎弟、逝去あつて四日目によみがへらるれば、——(六四頁)

⑦ トマス、その地方を布教する。

(サ) 帝王を先として、その国の万民をキリシタンになさせられ、——(六五頁)

⑧ その後トマスは他の地方を布教し、投獄される。

(サ) 又余の国へ赴き給ひ、——(六五頁)

⑨ トマスの殉教。

(サ) その時主人鉄の板を焼きてその上を歩ませ申せども、——(六五頁)

⑩ イシドルスとクリュノストモスのトマス評。

(サ) サントイシドロの曰く、—— (六六頁)
以上である。

なお、福島邦道氏は『研究篇』で「南蛮」の意味について考察なさっているが、本章の「南蛮」は(黄)との対応で「インド」となる。

以下、指摘してよさそうな(サ)の箇所を拾い出してみよう。

7—1 酒宴の半ばにジユデオなる女の喜びの歌を歌ひける中に、天地をつくり給ふデウスは御一体にてましますといふことわりを歌ひけるをアポストロ聞き給ひて、天を見上げ涙を流し給ふところを宮仕の者ども見て、これほどの祝言の座にて、何事を泣くぞとて、御顔を打ち奉れば、アポストロ問訊ありて、我が面を打ちたる者の手を犬の含みてここに来らんまで、この所を出づべからずし宮ふなり。(六三—六四)

(宮殿には、手に一管の笛をもったへブル人の乙女がいて、すべての客人にそれぞれなにか称賛の口上を述べていた。彼女は、聖トマスを見ると、彼がへブル人であることに気づいた。彼が馳走を食べもしないで、眼を天にむけたままであったからである。そこで、彼にへブル語でうたいかけた。「万物をつくり、海を浮かべたまひしは、天にまします神、イスラエルの神」聖トマスは、もう一度うたつ

てほしいとたのんだ。そうしているうちに、国王の酌人は、聖トマスが食べも飲みもしないで、眼を天にむけているだけであることに気づいた。そこで、酌人は、手をふりあげてトマスの頬を打った。トマスは、酌人に言った。「神が来たるべき世ではあなたに赦しをあたえ、この世ではわたしを打ったことの仕返しをなさってくださいますように。そのほうがいいのです。だから、わたしは、ここを立ち去りません。というのは、犬がわたしを打った手をここにもつてくるからです。」 1—81—82

ここでは(サ)の「宮仕(きゅうじ)」を挙げねばならぬだろう。邦訳日葡辞書に拠つて問題点を指摘すると次のようになる。まず、語意であるが、「ミヤツカイ。(宮仕)奉公すること、または、食卓「膳」の世話をする人。」とあり、「キユウジスル。(宮仕する) 食卓「膳」の世話をする。」という例を挙げている。そして、邦訳日葡編訳者の注として、「※1) 訓注によれば「宮仕」であるが、説明には「給仕」にあたるものを含む。両者同音の故に通用したか。給仕キフジ(易林本節用集)。」と問題点を指摘し、その後(サ)の本例を挙げ、(サ)の「言葉の和らげ」から「キユウジ(宮仕)宮ツカイ、仕ユル。食膳に奉仕する人」を挙げている。さて、(サ)の本例であるが、(黄)では「国王の酌人」となっているのである。つまり、(黄)では「国王に仕える酌人」の意であり、その「国王に仕える」と「お酌をする人」という二つの意味を一語で表わせれば日葡辞書

の「Qũji」という語になるわけである。筆者はこの暗合を非常に面白いと思つてゐる。

ところが、『時代別国語大辞典・室町時代編』で「宮仕」を引くと日葡辞書の例が示されているが、その語釈は「給仕すること、または、食卓で給仕する人」となっており、邦訳日葡の「奉公すること」が筆者傍線部のように「給仕すること」となつてゐるのである。これは原文の「O Seruir」の訳出上の違いである。これについて私見を述べると、筆者は邦訳日葡の訳出に従いたい。なぜならば、日葡辞書原文(勉誠社)で「Miyazuccai, o. õta」(宮仕う)、「Miazuccai, o. õta」(宮仕う)、「Tucaye, iru, eta」(仕ゆる)を引くと、それらの語釈はいずれも「Seruir」という語で始まつてゐる。そして、その語は邦訳日葡ではいずれも「奉公する」と訳出される。「Miyazuccai」(宮仕い)も「Seruir」で、邦訳日葡では「奉公」である。動詞「Seruir」の第一義は「奉公する」である。また、日葡辞書編訳者は語釈の際に「Qũji」の訓注の「Miyazuccai」の意味を当然意識してゐたであらう。このように考えると、筆者は邦訳日葡の「奉公すること」に従わざるをえない。日葡辞書の「Qũji」という語には、第一義的な「宮仕え」という語義の内に「給仕」という語義も含まれてゐると考えるべきであらう。落葉集には「宮仕」はあるが「給仕」は無い。なお、(サ)の「和らげ」の「Qũjã」(宮)の訓注「Miazuccai」は不可解である。「宦・官」の訓であるなら理解できるが。

次に、(サ)の「問訊ありて」であるが、疑問はそこで具体的に述べられてゐるわけではないから、「疑問に思つて」のよきな意なのか。「屈服して」の意はそぐわない気がする。

7-2 籠かごに入れて皮をはがせられ、殺し給はんとの宣旨を下されたるトウメといふ人は並びなき善人なるのみならず、アンジョの宮仕はれ給ふ人なり。(六四)

(あなたが生皮を剥いで火あぶりにするつもりの方は、神の仲間です。すべての天使たちがこの人に仕えています。) 1-86

(サ)の「はがせられ」は邦訳日葡辞書の「ハガセ・スル・セタ」で、語意は「皮を剥ぎ取らせる」である。この動詞に注目したい。これは下二段活用。また、「アンジョの宮仕はれ給ふ人」の「れ」であるが、これは「アンジョの」の「の」を「に」と読み替へることによつて「受身」となる。この「宮仕ふ」であるが、前出の「宮仕」という語の第一義と通じる。(黄)では「仕える」である。

7-3 帝王ていおうを先まづとして、その国の万民をキリシタンになさせられ、種々の御説法を述べ給ふなり。「つ」には、テウスてうす三つのペルソナ(位格)一つのススタンシヤ(実体)にたまはしますこと。「二」には、マチリモニヨ(婚姻)を守るべきこと。三つには、他の物を奪はざれとのこと。四つには、

飲食大過のこと。五つには、ベニテンシヤ(悔悛)専らなりといふこと。六つには、この教への進退(しんたい)を守り届くるために、精を入れるべきこと。七つには、悪人善人によらず、

「アウスに対し奉りて大切に思ふべき子細(しじや)の条々を示し給ひて後、その国を退き給ひ、(六五)

(それから一ヶ月後、聖トマスは、その地方のすべての貧しい人たちを呼び集めさせた。——(六行分省略)——

使徒は、教えを説きはじめ、徳の十二の階段について話した。「第一の階段は、本質においてひとつであり、位格において三位である神を信仰することです」そう言つて、三位一体の三つの明白な例をしめした。——(五行分省略)

——さて、徳の第二の階段は、洗礼を受けることです。第三の階段は、淫欲をつつしむことです。第四の階段は、貪欲を避けることです。第五のそれは、暴飲暴食をやめることです。第六のそれは、悔悛をすることです。第七のそれは、これらの徳をあくまで守りぬくことです。第八は、慈善を愛することです。第九は、あなたがたのあらゆるわざにおいて神のみどころをもとめ、神のみどころにしたがうてのみ生きることです。第十は、神のご意志にもとるようなことを避けることです。第十一は、敵をも味方をも愛することです。第十二は、以上のすべてを履行するように見張りをおこたらないことです」この説教のあとで、九千人の男と数かきりない女子供が洗礼を受けた。

1—87

188

この説法すなわち教訓条は、(サ)は七条、(黄)は十二条となるが、比較考察してみると次のようになる。

すなわち、(サ)の一(三位一体のこと)は(黄)の一(同上)に対応し、(サ)の二(婚姻を守れ)は(黄)の三(淫欲をつしめ)に対応すると言える。また、(サ)の三(他人の物を奪うな)は(黄)の四(貪欲をつしめ)に対応すると言える。(サ)の四(飲食大過をつしめ)は(黄)の五(同上)に対応し、(サ)の五(悔悛をせよ)は(黄)の六(同上)に対応する。(サ)の六(この教えを守るために努力せよ)は(黄)の七(同上)に対応し、(サ)の七(悪人・善人ともに愛せよ)は(黄)の十一(同上)に対応するのである。なお、この七の「アウスに対し奉りて大切に思ふべき子細」とは、前出6—7項で触れたように、「神のために(神の愛にかけて)万人を愛さなければならぬ理由」という意になるだろう。

ところで、(黄)の二(洗礼を受けること)が(サ)には無いが、どうして最重要と言えるこの条が無いのか不審ということになるが、それは(サ)の冒頭の筆者波線部を読むとわかる。「——万民をキリシタンになさせられ」とあり、すでに人々を受洗させている、と解釈できるのである。それに対して(黄)では、末尾の筆者波線部にあるように、この説教後に人々を受洗させているのである。

その他の点では、(サ)に無い(黄)の条目は八・九・十・

十二であるが、(サ)ですでにキリシタンになった人々に説くには、七(この教えを守るために努力せよ)がある以上、九(神のみ心を求め、み心に従って生きる)、十(神のみ心にもとめることはしない)は重複の感があるし、八(慈善を愛せよ)は(サ)の七(悪人・善人ともに愛せよ)があれば充分で、十二(教えを守るための注意)も(サ)の六があれば蛇足の感がある。これらもそれぞれの底本の違いによるものであろう。

7-4 ① 又余の国へ赴き給ひ、その国の主人の小舅をキリシタンになし給へば、兩人共に籠者となすなり。(六)

五

(このあと、聖トマスは、南部インドに行き、そこでまたの大きな奇跡をおこなった。彼はまた、センチケという女性を改宗させたが、彼女は、王のいちばんの側近のひとりであるカリシウスの妻ミグドニアのおさな友だちだった。——(十一行分省略)——この説教を聞いて、ミグドニアは信者となり、以後良人と同衾することをこぼんだ。そこで、カリシウスは、王に訴えて、聖トマスを投獄させた。) 1-88-89

これはかなりの難物なのだが、一応対応を模索してみようと思う。大筋では対応が求められるのである。

まず、(サ)の「その国の主人の小舅」だが、これを(黄)の「ミグドニア」に対応させて考えることにする。「ミグドニア」

は王の側近カリシウスの妻であるが、次の②の(黄)の筆者波線部にあるとおり、「王妃の妹」である。そして、その「王」が(サ)の「その国の主人」ということになる。

次に、(サ)では「兩人」が投獄されたのだが、(黄)では「トマス」だけとなる。

② その主人の籛中我が弟を異見せんとて、籠のほとりに近づき申さるるにアポストロ御教化なさるれば、すなはちキリシタンとなり、(六五)

——(約三行分省略)——カリシウスは、王妃を妻ミグドニアのところへ寄こしてほしいと王にたのんだ。王妃は、ミグドニアの姉であり、ミグドニアの考えを変えさせることができるかもしれない、とおもったのである。王妃は、妹を訪ねたけれども、妹を改宗させるつもりが、逆に妹に改宗させられてしまった。) 1-89

(サ)の「その主人の籛中」は(黄)の「王妃」に対応する。この場合の「籛中」は邦訳日葡辞書には「下(下位)」では、貴人の妻の意」とあるが、九州方言としている点が不審。森田武氏は『日葡辞書提要』において、方言注記例の諸問題についても詳細に述べておられるが、この語については言及なさっていない。

なお(サ)では「主人の籛中」は「アポストロ」によって改宗させられるのだが、(黄)の「王妃」は「妹」に改宗させら

れる。だが、いずれにしてもキリシタンになる点では変わりはない。
無い。

③ それよりして夫婦の交はりを断たれければ、その夫なる主人いよいよ怒りを起こし、からめながら召しよせ、我が妻をかへされよと言ひければ、アポストロの宣はく、(六五)

(七行分省略) そして、それからはもう王の言いなりになろうとしなかつた。王は、おどろいてカリシウスに言った。「わしは、おまえの奥さんを取りもどしてやろうとして、自分の妻を失ってしまった。というのは、わし奥妻は、おまえの奥さんよりもさらに意地わるになり、わしの言うことをきかんのだ」王は、それから聖トマスの両手をしばつてつれてこさせ、女たちに良人のもとに帰るよう
に言つてきかせよと命じた。聖トマスは、 1190

(サ)の「主人の簾中」は「主人」との夫婦の交わりを断つた。
(黄)では「王妃」は「王」の言いなりにならなくなつたのであるが、筆者波線部を見ると、王の側近カリシウスの妻ミグドニア(王妃の妹)がカリシウスとの夫婦の交わりを断つた(①参照)以上に、王妃が王に対して意地悪になつた、という意味のことを王が述べているのであるから、ここは内容的に(サ)と対応すると言える。

対応点については以上であるが、(サ)の編訳者が(黄)の

ような内容をこのように簡略化したとは考え難い。この場合も底本の違いによるのだろう。

7-5 その後又日輪の形を拜ませ奉らんとしければ、テウスてうすの御力みちからをもつてかの形の内にこもり居ける天狗出でて、蠟ろうの火に消ゆる(解くる)ごとくになれと宣ふとにも、本尊たちまちくだけければ、もろもろの出家等しやうとう声をあげて、我等が仏の恥をすさんがんとて槍にて突き殺し、マルチルになし奉れば、御アニマあにまは天に至り給ひ、御死骸みつかいをばキリシタン納め奉りぬ。(六五-六六)

(そこで、カリシウスは、王に進言した。「この男に太陽神に供物をささげさせましよう。そうすれば、いままでの男を責苦から救つてきた彼の神も、彼に腹をたてるでしよう」聖トマスは、無理やり太陽神に供物をささげさせられようとしたとき、——(約八行分省略)——偶像のなかに住む悪霊にへブル語で、わたしが偶像のまえにひざまずいたらすぐさま偶像を破壊するように、と命じた。そして、偶像のまえにひざまずくと、こう言った。「見なさい。わたしは、あがめます。しかし、このいつわりの神、この青銅のかたまり、この偶像ではなく、わが神、わが主イエス・キリストをあがめます。偶像のなかにいる悪霊よ、キリストの聖名において、このいつわりの神を破壊すること命じるぞ」すると、いつわりの神は、たちまち蠟細工の

ように溶けうせた。これを見て、邪教の祭司たちは、聖トマスをののしり、神殿をあずかる祭司長は、剣をふりかざして彼を刺し、「わが神の復讐だ」と叫んだ。しかし、王とカリシウスは、その場から逃げ去った。というのは、群集が使徒の仕返しに祭司長を火あぶりにしようとするのを見たからである。そのあと、キリスト教徒たちは、聖トマスの遺体をねんごろに葬った。) 1191192

(サ)だけを読んでもいれば、この内容はこれで一応意味が通る、つまり、アポストロの神通力で偶像(日輪の形)の中にいた天狗が外に出た、その後、アポストロは偶像を破壊した、ということになるわけだが、(黄)を読んでしまうと改めて「天狗」の存在・役割が不分明、すなわち筆者傍線部「デウスの御力をもつてかの形の内にこもり居ける天狗出でて」が不分明で宙に浮いているということになる。「天狗出でて」を「天狗出だして」とし、「蠟の火に消ゆる(解くる)ごとくになれ」を「——ごとくによせよ」とすれば、(黄)の内容に近づくとと言える。なお、「(解くる)」は(サ)の第一巻巻末正誤表で正とする表現。「解くる」は邦訳日葡辞書では「溶解する」の用例として、「ラウガトクル。(蠟が溶ける) 蠟が溶ける。」を掲げている。

なお、「日輪」は邦訳日葡辞書の語釈は「太陽」だが、「ニチジン(日神)」の項には「ニチリンノ カミ。(日輪の神) 太陽のイドロ(Toto) 偶像。すなわち、ゼンチヨ(Gentios) 異教徒がイドロと考えている太陽。」とある。(サ)の「和らげ」でも

「日輪」の意味は「太陽」。一方、邦訳日葡では「カタチ」は「姿形、または、顔つき」の意味しか無いが、「モクザウ(木像)」を引くと「キノ カタチ。(木の像) 木製の彫像」とある。これは(サ)の「和らげ」でも同じである。故に、「かたち」を「像」と考えることもできるが、この文脈ではそれは無理であろう。

7-6 サントイシドロの曰く、このアポストロもセズキリ

ストのよみがへり給ふことを聞き給ひて、信ぜられず、相あひま看し奉り、手をかけて信じ給ふなり。バルトス、メドス、ベルサス、フラクマネスの人数にエワンゼリヨ(福音)を弘め給ふなり。又なほ先に行き給ひ、東ひがしの果まで御談議し給ひ、槍にて突き殺され給ふなりと。(六六)

(イシドルスは、「諸聖人の出自と生涯と死」のなかで聖トマスについて書いている。「彼は、主の使徒であり、主に似ていた。聞いたことを信じないで、見たことを信ずる人であった。彼は、バルティア、メディア、ペルシア、ピルカニア、バクトラの人びとに福音を説き、また、東洋に行つて、異教徒たちの奥地までわけ入った。そして、彼らに教えを説いて、ついに殉教し、満身に槍を受けて死んだ」) 1192

(サ)の本章の章題に「これサンイシドロの記録なり」とありながら、ここで改めて「サントイシドロの曰く」とあるのはどうしてか。(黄)でも「イシドルスは」とあるから、(サ)

は(黄)と一致している。しかし、(黄)は本章の冒頭でイシドルスに拠るなどとは言っていない。つまり、(サ)の本章の構成は(黄)と一致しているということになるのではないか。

(サ)の筆者傍線部「このアポストロもゼスキリストの——」については拙稿「その二」で言及した。「も」は「は」の誤植。

(サ)の筆者傍線部では「ブラダグマネス」が(黄)には無い。この「Bragmanes」は「バラモン」の意の梵語「brahmana」と語形が似ている。姉崎正治氏は「切支丹宗教学」の「サントウメ」の脚注で、これを「バラモン即ち印度人といふ心」としておられる。なお、氏は他のものを「パルチャ人。メデス人。ベルシヤ人」とされる。

7-7 サンキリストモの曰く、このアポストロはゼスキリストの御誕生より十三日目に参拝仕られたる三人の帝王の国へ下り給ひて、その人々にも御授けを授け給ひすなはちその人々よりこのアポストロの御教へに力を添へ給ふなりと。(六六-六七)

(クリュソストモスも、語っている。聖トマスは、おさな子キリストを拜みにやってきた東方の三博士(一)四章参照)が住んでいた土地に行き、彼らに授洗した。そして彼らは、以後キリスト教のよき協力者となった。(と) 1-

92

(サ)の「サンキリストモの曰く、」で始まる本文も(黄)

と対応している。また、「三人の帝王の国」は(黄)では「東方の三博士が住んでいた土地」となっている。(サ)には「博士」という語が出ないところに注目したい。これは拙稿「その一」で言及した。また、「すなはちその人々より——力を添へ給ふなり」の「より」に注目しておきたい。(黄)では「彼ら」である。東方の三人の帝王の国の人々だから、既座に協力したのであろう。

三 (8) 聖フィリッペ

(サ)における本章の章題は、

サンフィリッペ アポストロのマルチリヨの様体 これサ
ニシドロとサンアントニノの記録なり。

とある。(サ)の本文はテキストの六八頁から七〇頁まで(ただし七〇頁は一行のみであるが、冒頭部を除き、あとは大体(黄)と対応している。一方、(黄)は第二巻第六章「使徒聖ピリポ」であるが、本文は一五〇頁から一五二頁までの三頁分である。

分量的にも両者はほぼ同じと言える。(黄)は冒頭部の「ピリポ」という名前前の解説部を除き、あとは大体(サ)と対応している。なお、「ピリポ」は「Philippus」で、「フィリッポ、フィリポスとも表記される」と(黄)の注(一)にある。

対応部の概要は次の通り(番号は筆者)。

① ピリポの布教のこと。

(サ) ゼズキリストの御パシヨンの以後、—— (六八頁)

② 殉教七日前のこと。

(サ) 又マルチリヨの七日前にもろもろのビスポ、サセルドウトスを一所に集め給ひて、—— (六九頁)

③ 二人の娘とともに埋葬されていること。

(サ) サントイシドロの曰く。—— (六九頁)

④ もう一人のピリポのこと。

(サ) ここにおいて心得べきこと一つあり。—— (六九頁)

以上である。

8—1 ゼズキリストの御パシヨンの以後、このアポストロ深きヘルオル(熱情)をもつてシチャといふポロペンシヤ(州、管区)のイエラポリといふ在所をはじめとして在々所々に二十年の間エワンゼリヨ(福音)の御談議をし給ふなり。ゼンチヨ(異教徒)より搦められマルテといふ仏前にサキリヒイシヨ(犠牲、捧げ物)の為に引かれ給ひ、その前に着き給へば、仏殿の心柱のもとより恐ろしき大蛇出でて、その毒気をかけサキリヒイシヨの為に、火を調ゆる出家の司の子を殺すなり。(六八)

(使徒ピリポは、二十年間スキュテアアの地で伝道に従事した。最後に、異教徒たちに捕えられ、軍神マルス(ギリシア神話のアレースにあたる)の立像のまえへ引いていか

れて、香をささげよと言われた。ところが、そのとき、偽神の柱の下から大きな竜があらわれて、供犠の火を焚いていた神官の息子を殺し) 2—150

(サ)の「シチャといふポロペンシヤのイエラポリといふ在所」の「シチャ」は(黄)の「スキュテア」と対応する。この「スキュテア」は(黄)の本章注(二)の解説中にある「ウクライナ地方」である。また、同注に「小アジアで伝道し、プリュギアのヒエラポリスで殉教したと伝えられるが、この殉教についても、ここに語られる伝承以外は不明である。」とあるが、(サ)の「イエラポリ」がこの「ヒエラポリス」であるとすると、(サ)は「ウクライナ地方の」シチャという州のイエラポリ(小アジアのプリュギア地方の町)ということになり、意が通じない。後出8—3・(1)の(黄)では、「その後、ピリポは、アジアの町ヒエラポリスに行き、」とあるが、これは(サ)とは対応しない。(黄)ではこの地で殉教したと読める。このように考えると、(サ)では「シチャ」での伝道のことと、「イエラポリ」での殉教のこととを一括して述べてしまっていると言えるのである。これは編訳者の誤解によるものと、まずは考えられるのである。

また、格助詞「より」の用いられている点で気になった例を7—7で挙げたが、ここにも(サ)の「ゼンチヨより搦められ」がある。これは(黄)では「異教徒たちに捕えられ」である。『きやどべかじる』(二五九九年本)を見ると、「罪の賤女に搦められて」(上8オ3)がある一方、「悪人どもより搦められ給ひ」

(上18才11)もある。一考を要するところと思つてゐる。

なお、(サ)の「マルテ」は那訳日葡辞書の「グンジン(軍神)」に「イクサガミ(軍神)」に同じ。マルテの神、すなわち、戦争の神」とある。森田武氏の『日葡辞書提要』五二三頁にこの点についての言及がある。また、(サ)の「大蛇」はここでも(黄)の「竜」と対応する。「仏殿の心柱」と「偽神の柱」との対応にも注目すべきか。

8—2 その時アポストロ人々に宣ふは、我が異見を聞かれば、息災を得べし。又死しける者はよみがへり、人に仇をなす大蛇を我が御主の御名をもつてこの所より退治、せらるべしと。その時人々我等より何事をせよと望み給ふぞと申せば、この仏体をうちくづして、その代りに我が御主のクルスを据えて、それを拝まれよと宣ふなり。病に責めらるる者どもマルテをうちくづして、平癒させ給へと叫ぶなり。(六八)

(ピリポは、一同に呼びかけた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたたちがこのいつわりの神像を打ちこわし、かわりに主の十字架をあがめるならば、あなたたちの病人を癒し、死んだ人たちが生きかえらせてあげましょう」すると、毒にあてられた人たちは、苦しみあえぎながら答えた。「お願いです。どうか病気を治してください。そうすれば、すぐにもこの偶像をとりこわします」) 2—150

151

(サ)の「我が異見」とは具体的には「この仏体をうちくづして、——」のことである。(黄)との対応からもそう言える。また、「退治、せらるべし」と主体が「人々」のように言つてゐるが、これは表現上のことであつて、実際はピリポが退治する。「我等より何事をせよと望み給ふぞ」は(黄)との対応は無いが、この「より」に注目しておきたい。これは、どうしても「我等に——」とあるべきところではないか。なお、「平癒させ給へ」は「せさせ」ではない例。

8—3・(1) それをもつて前アポストロに対して、仇をなし奉りたる者ども後悔のペニテンシヤ(悔後)を勤め、ヒイデス(信仰)に受くるなり。アポストロ彼等に一年の間御談議し給ひ、ヒイデスのアルチゴ(箇条)と、助かるために要るほどの題目とを教へ給ひ、数多の人数をクリシタンになし給ふなり。又マルテといふ仏をくづして、数千人にバウチズモ(洗礼)を授け、その中よりよき人をバアデレと、チャコノ(助祭)の位に定め給ふなり。(六九)

(この人たちは、みな信者になつた。ピリポは、彼らのもとに一年間滞在し、福音を説き、彼らのなかから司祭たちと助祭たちを定めた。その後、ピリポは、アジアの町ヒエラポリスに行き、この町で、クリストはイエスという仮現の肉の姿をとつたにすぎないと信じるエピオン派の異端

者たちを根だやしにした。聖ピリポには、また娘がふたりあつた。信心ぶかい乙女たちで、主は、このふたりをつうじて多くの人びとを信仰にみちびかれた。」 2—1151

(サ)の「それをもつて前アポストロに対して、——」の「前(まへ)」は「以前」の意だが、たいそう口語的な訳出である。これは(黄)とは対応しない。「それをもつて」は前段の末尾部の内容を受ける。また、(黄)の「その後、ピリポは、」以下は(サ)には無い。

8—3・(2) 又マルチリヨの七日前にもろもろのビスポ(司教)、サセルドウテス(司祭たち)を一所に集め給ひて、御談議あり、ヒイデスの強き心を持たるるやうに教へさせられ、その人々に渡し給ふ万民に助かる道を教ゆるための心掛をすすめ給ふなり。遂に八十七歳にてゼンチヨより取られ給ひ、御師匠の御教へに弘め給ふクルスに懸けられたまひ、實き御一命にて終り給ふなり。

この責きアポストロは二人の娘を持ち給ふなり。これをもつてアポストロになり給はぬ前は、妻子を帶し給ふと知れたり。この二人の御娘もビルゼン(処女、童貞女)に届き給ひ、その善のかがみと、御教へをもつて数多の人をヒイデスの道に導き給ふなり。かの二人ともに無事に死し給ひてより、御父の御死骸の側に左右に埋まれ給ふなり。

(六九)

(殉教死の七日まえに、ピリポは、管下の司教たち、司祭たちを全員よび集めて、こう話した。「主は、あと七日の命をわたしにくださいました。わたしに主のいましめをあなたがたに伝えさせて、あなたがたを強くしようとお考えです」このとき、聖人は、齢八十七歳になつていた。そのあと、異教徒たちは、彼を捕えると、彼がその福音を宣べひろめた師(イエス)の**ばあいとおなじく**、十字架にかけた。こうして、ピリポは、主のみもとに召され、生涯を至福のうちに終えた。ふたりの娘も、父のかたわら、ひとり右側に、ひとりは左側に葬られた。」 2—1151

(サ)の「その人々に渡し給ふ万民に助かる道を教ゆるための心掛をすすめ給ふなり。」については拙稿「その二」で言及した。(黄)を参照すると、「万民に助かる道の心掛けをすすむるために、御主、我を汝だちに渡し給ふ」と宣ふのようにならなければならぬのではないか。「その人々に渡し給ふ」が不可解なのであるが、ここは段落が改まって話題が変わつたところであるから、「その人々」はビスポ(司教)以下を指すとしか考えようがないので会話体では「汝だち」とした。「渡し給ふ」が最大の問題であるが、(黄)の「(主は)——わたしに主のいましめをあなたがたに伝えさせて、」を参照して、「我を汝だちに渡し給ふ」と考えたのである。一方、(黄)から離れて「渡し給ふ」を再検討すると、「ピリポがビスポ以下に、自分の伝道上の責務を委任した、後事をゆだねた」と考えるこ

ともできる。ただし、この場合は「——渡し給ふ」で文が完結し、ピリオドが必要ということになる(本文ではピリオド無し)。

また、(サ)の「この責(尊)キアポストロは二人の娘を——」

以下の内容は(黄)のこの対応部だけではなく、前段の(黄)の「聖ピリオには、」以下の内容とも対応する。

なお、「ゼンチヨヨリ取られ給ひ、」の「ヨリ」があるが、これは(黄)では「異教徒たちは、彼を捕えると、」となっている。「ハビヤン抄キリシタン版平家物語」を見ると、「主上は平家にとられさせられて(165)、「きのお武士に捕られて(335)、「(323)、「武士どもに捕られて上る時(335)、「いずれも」に」である。

8—4 サントイシドロの曰く。このアポストロ フランサ(フランス)の国にも御談議し給ひ、闇に居けるゼンチヨをヒイデスの光を受くるキリシタンになし給ふなり。その次にヒリヂヤといふ国においてクルスに掛けられ給ひ、つぶてを打ちかけられ給ふなり。その所において二人の御娘ともに埋められ給ふなりと。(六九)

イシドルスは、「諸聖人の出自と生涯と死」のなかでピリオにふれている。「ピリオは、ガリア(フランス)の人たちにキリスト教を伝え、また蒙昧の闇と荒海の岸辺に蟠踞していたその他の異邦の人たちを認識の光のもとにつれだし、信仰の港にみちびいた。最後に、ブリュギアの町ヒ

エラポリスで十字架にかけられ、石打ちにされ、同地にふたりの娘たちとともに埋葬されている」イシドルスは、このように書いている。) 2—1151—1152

(サ)の本章の章題では、「これサンイシドロとサンアントニノの記録なり」とあるが、ここで改まって「サントイシドロの曰く」とある。本章では右の両者の記録を用いている(章題を信ずれば)のだから、既出7—6の場合ほど奇異な感じは受けないが、問題はこれが(黄)と対応するという点であつて、この点に注目しておかねばならないだろう。

また、(サ)の「その次にヒリヂヤといふ国においてクルスに掛けられ給ひ、」は(黄)の「最後に、ブリュギアの町ヒエラポリスで十字架にかけられ、」と対応する。「ヒエラポリス」は既出8—1で問題とした(サ)の「イエラポリ」。なお、(サ)の「その次に」は(黄)の「最後に」との対応で考えると訳出の点で不審を感じるが、(黄)から離れて読めば、サントイシドロの掲げる二番目の要点として、というニュアンスでの「その次に」という表現と考えることができるだろう。

8—5 ここにおいて心得べきこと一つあり。アクタ アポストロルン(使徒行伝)八つに見えたるごとく、エチオピヤのエウヌコにパウチズモを授け給ふヒイリツベは、このアポストロにはあらず、その故は、かのエウヌコに授け給ふはアポストロより定め給ふチヤコノ七人の中なり。かの

「一番のヒイリツベはセザレアに埋うづまれ給ふなり。ヒイリツベ アポストロは御娘二人持ち給ひ、二番のは娘四人よちひを持ち給ふと聞こえたり。 (六九―七〇)

(ところで、七人の助祭たちのひとりであつたもうひとりのピリポがいる。このピリポについて、ヒエロニムスは、多くの奇跡とするしをおこなつたのち、六月六日カイサリアで永眠したと、『殉教録』に記している。そのかわらには、三人の娘たちが埋葬されており、四人目の娘は、エペソスに眠つてゐるという。しかし、上述のピリポは、このピリポとは別人である。というのは、前者は使徒で、後者は助祭であつたからであり、前者はヒエラポリスに、後者はカイサリアに眠つてゐる。前者には預言する娘がふたりあつたが、後者には四人の娘がいた。もつとも、エウセビオスの『教会史』には、使徒ピリポには四人の預言する娘があつたとある。しかし、われわれは、この点にかなしてはヒエロニムスの説を信じるべきである。) 2―1

52

この(サ)の主旨は、本章の「ピリポ(ヒイリツベ)」のほかにもう一人の「ピリポ」がいるが、両者を混同してはならないということである。もう一人の「ピリポ」とは『使徒行伝』第八章(26―39)に登場する「ピリポ」のことである(これは「使徒」ではなく「助祭」である)。

(サ)の「エウヌコ(宦官)」については拙稿「その二」の22

―3で言及した。また、「アポストロより定め給ふチヤコノ七人」の「アポストロ」は本章の「ピリポ」のことではない。『使徒行伝』第六章における「十二使徒」を指しているのである(複数の「アポストロス」でなければならぬ)。なお、この「より」にも注目したい。「かの二番のヒイリツベ」はもちろん助祭の「ピリポ」を指すのであり、「このアポストロにはあらず」の「このアポストロ」が「二番の」ということになるわけであるが、「一番の」という表現はどこにもない。おもしろいことに、(黄)の「上述のピリポは、このピリポとは別人である。」の「上述のピリポ」とは本章の使徒「ピリポ」を指すわけであるが、少なくともこの段落(話題は前段落と違ふ)には使徒「ピリポ」は出てきていない。

なお、(サ)では「ヒエロニムス」や「エウセビオス」は出てこない。この辺のところの問題として残るが、二人の「ピリポ」の区別を説いている点は(黄)と一致する。「ヒエロニムス」は(サ)の他の章では「サンイエロニモ」(拙稿「その二」)、「エウセビオス」は同じく「エウセビヨ」(拙稿「その四」)である。また、「セザレアに埋うづまれ給ふ」の「埋む」は四段活用だが、邦訳日葡辞書の仮見出し語に「ウヅマレ、ルル」がある。これは見出し語「チンマイ(シヅミ、ウヅム)沈埋」の語釈にある「ウヅマレタ コト。隠れたこと、または、埋もれたこと」という用例に基づいて立てられたものであるが、この語釈から「受身」の意が読み取れないことから、一語として、仮見出し語とされ

たのであろう。
本稿は以上。

注

- (1) 『キリシタン書・排耶書』(岩波書店)の「洋語一覧表」に「ずきりば Scria(ラ) 律法学者」がある。用例は「御バシヨンの観念」にある。なお、「Scriptura(聖書)」を「スキリツウラ」とするのであるから、「スキリバ」よりも「スキリバ」とする方がよいであろう。
- (2) (サ)のテキストの「原語一覧」には「ビスボ」「サセルドウテ」とともに「司祭」とあるが、前者は「司教」である。拙稿「その三」の3—15の「司祭」は「司教」と訂正する。なお、「テオドロアルセ」については未調査。
- (3) (黄)の「聖ヤコブ教会」についての注(二)の中に次のようにある。「これがサンティアゴ大聖堂の伝説上の前身。——以下に述べられる巡礼奇跡譚で「聖ヤコブの墓所」とあるのは、このサンティアゴ大聖堂のことである。」
- (4) (黄)の注(二)を中心にしてまとめると次のようになる。(サ)の「Parthos」は(黄)の「バルティア」で、これは西アジアの古代国家。(サ)の「Medos」は(黄)の「メディア」で、これは(黄)の注(九)によると、アッシリア滅亡後のオリエントにおける有力な王国。(サ)の「Persas」は(黄)の「ベルシア」。以下は対応しないが、(黄)の「ヒルカニア」はカスピ海南東の荒地。「バクトラ」はアジア南西部の古代国家バクトリアの首都で、ゾロアスター教信仰の中心地。
- (5) (黄)の「ヨハネス・クリュソストモス」(三四四ないし三四五—四〇七)。コンスタンティノポリス総大司教、教会博士。拙稿「その三」参照。